パネルディスカッション
里山に託す私たちの未来

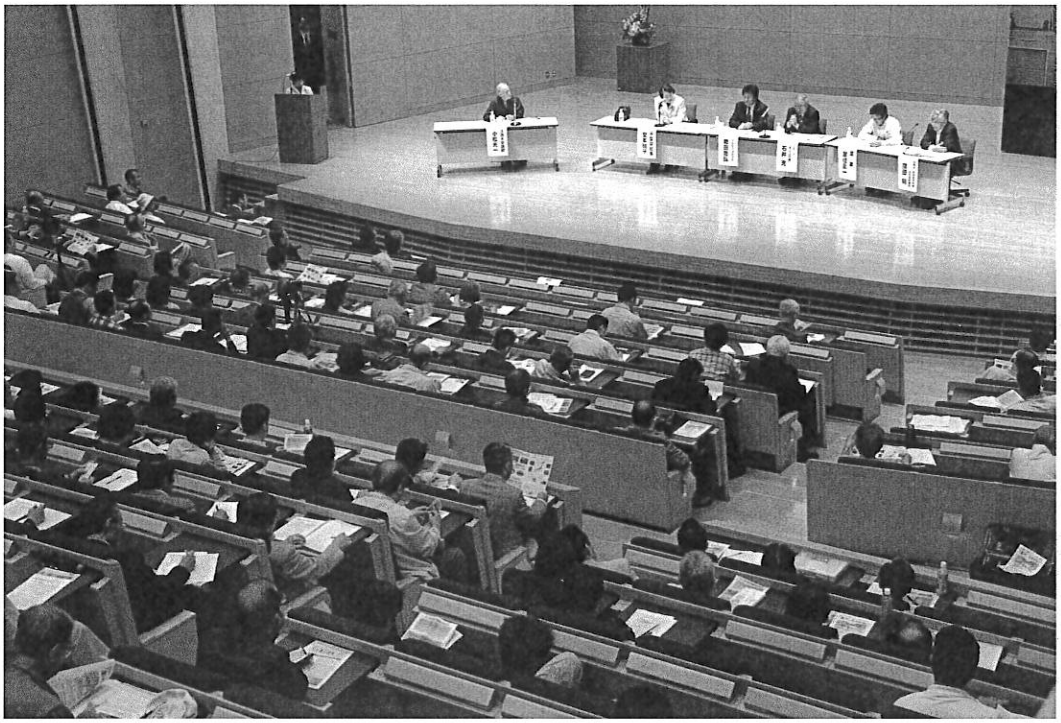
「里山となりわい」

パネリスト

堂本　暁子　（千葉県 知事）
室住　圭一　（農業）
石井　充　　（グループ「木と土の家」）
稗田　忠弘　（さんむフォレスト）
廣田　明　　（林野庁森林整備部計画課）

コーディネーター

小松　光一



堂本

京葉臨海工業地帯の中でも散々私は企業の方とも緑化の問題でお話しましたけれども、その中でもどういう風に保つかという問題と、里山の農業を守る、農業のあり方を守るように、農業ならある程度何とかできるのではないか、圃場整備として土を高くしたり、しかしそうすると本当の意味の循環はできなくなってしまう。とするとこの広い千葉県を里山で覆うことはできないかもしれません。しかしある部分については景観を守り、里山をみんなで守っていく、そのことを好む人たちがそこに住み守っていく、例えばひとつの市や町や集落がそういうことをやるということはできるのです。とても漠としたお話をしているようですが、そのようなことでもしないと、いずれ全部が壊れていってしまう。その生物の連鎖を断ち切らない部分を残していくことによって、壊れてしまった部分にも朱鷺が飛んでくる、東金にも朱鷺が飛んでくることが可能になるのではないかと思います。

司会　では順番にお願いします。

稗田　私は、山武杉を使って家づくりをしている「さんむフォレスト」の代表をしております、稗田と申します。私たちは、今自分たちが住む山武地域の山武杉の現状をよく把握した上で、山武杉による住まいづくりを提案しております。私たちのやっていることは、山武杉を使って、山武地域の大工さんや左官屋さんや建具屋さんなどの技能者が山武の民家をつくるという運動です。これはひとつの地域循環をつくっていこうという運動ですけれども、この山武を千葉という言葉に置き換えれば、千葉の家を千葉の職人さんがつくるということになりますが、ひとつのモデルとして山武地域で行っているのです。私たちが今している家づくりというのは、山武杉の状況が今とてもひどい状況になっている、日本の林業というのは全体的に荒廃している状況ですが、山武杉には特に非赤枯性溝腐病という病気が蔓延しておりまして、これは皆さんも杉の木をご覧になるときに分かると思いますが、幹が半分えぐれたようになってしまう病気に大半の山武杉がかかってしまっているのです。これは手入れが行き届かない現状が原因なんですが、そういう山武杉はほとんどゴミです。四角い柱をとるのに、半分腐っていてはそれがとれないのですから。ちょうど柱がとれるかとれないかという高さの場所が腐ってしまうということもあって、材としての価値がなくなってしまうのです。これはほとんどゴミとして扱われているのですが、実際には一軒の家の中で短い木材を使うところもたくさんありますし、使い方によってはちゃんと使えるのではないかと考えています。山武杉の抱えている問題というのをどう家づくりに反映していくかということを提案しております。また、地元の大工さんがつくるということに意味があるわけで、私たちは金物を極力使わない、伝統的な工法でつくろうとしています。今の家の、金物を使ったつくり方というのは、一般的に住宅金融公庫が始まってから金物を使って家をつくりなさいという指針を出してきて、今日本の家づくりのスタンダードになっているのですが、私たちの理解の仕方としては、住宅金融公庫のつくり方が最高のつくり方なのではなくて、あれは最低限の、せめてこれくらいにはつくりなさいという基準なのです。熟練した技能工がすぐに育つわけではありませんから、熟練していない大工さんでもこういう方法だったら家ができるでしょう、ということで出たのが金物を使った家づくりなんです。本来の住まいづくりというのは、日本の大工さんたちが延々と伝えてきた技能の伝承というのは非常に価値の高いものがあって、実際に私たちはそういうつくり方をしていますが、建てている現場で実感として、こんなに丈夫な家ができるのだということを肌で感じます。これは組み立てていきながら、その丈夫さに自信がもてるのです。これが本当の意味での技能なんです。そういうことができる方がまだいるうちに、できるだけそういう仕事場をつくって、それを継承してもらう努力をしていかなければいけないなと思っています。しかし残念ながら、私の知っている範囲でも、せっかく長年の間に身につけた技能をもちながら暮らしていけない、仕事がないためにハウスメーカーの大工さんになってしまうとか、ペンキ屋さんになってしまうとかがいるという残念な状況です。今は、約8割の住宅をハウスメーカーがつくってしまうということもあって、実際なりわい的にコツコツやる仕事というのが成り立ちにくいのが、今の現状なのです。また、一人でコツコツやるような大工さんにはハウスメーカーがつけるような補償の能力もありませんし、保険にも入っていないという方が多いのです。それに不安を感じる方はハウスメーカーに頼んでしまう。ただ、問題というのはこれまでのような流れで、谷津田や森林が荒れるということを、森林・農林業分科会で話し合ったのですが、実際にそういう大工さんがいなくなってしまうと山は荒れるのです。ハウスメーカーは、できるだけ安い材料を海外からもってきて効率的な方法で家をつくるのですが、地元の材を活用したコツコツやる家づくりというのは大工さんにしかできないのです。一番のもっと大きな問題というのは、せっかく長い間かけて家が建てられるほどお金を貯めたのに、それをハウスメーカーにぽんとお金を払って、契約書に判を押して私の家をつくってくださいと頼むと、その4割～5割がテレビの宣伝で流れてしまったり、また立派なパンフレットになってしまったりして、残るのはその5割～6割でつくった自分の家だけなのです。でも地元の大工さんに地元の材料でつくってくださいという頼み方をすると、まず地元の木を育てた林業家に少しお金がまわりますね、その木を運んできて製材している製材工さんがいますね、丸太を見てこの木からどういう木がとれるかという判断をできるというのは非常に優れた文化のひとつなのです。そういう人が生活できる。

司会　ちゃんと循環するということですね。

稗田　それを売る材木やさんがお金になって、その材木を半年もかけて手刻みをする、ということはその半年の間、その大工さんの家族は暮らしていけるということなんです。子どもは学校に行けるし、奥さんはお化粧ができるのです。そういうお金が地元に残っていくということがとても大事なのだと思っているのです。東京にどんどんお金が吸い上げられていくという今の仕組みにこのままるまる乗っていますと、地方は地域の人がせっかく貯めたお金をぽんと東京に持っていかれてしまい、どんどん貧しくなるのです。せめてそれを地元に残して地元がまわるようにしていかないと、地方っていうのはどんどんだめになるし、経済的にもだめになるし、森林も荒れるという悪循環になるのです。それを地域循環の上手い仕組みの中で解決していこうというのが私たちの提案です。

まず、私たちの住まいには必ず薪ストーブを入れるのです。というのは、化石燃料を使わないで冬の暖房をしてもらおうという意図なのです。一軒の家を、40坪の家を建てるとすると、私どもの建てる家は非常にたくさんの木を使うものですから、60 ㎥以上の木を使います。そうすると、丸太を製材する時にでた端材や切り落とした残材というのが約 40 ㎥くらいになるのです。とすると、40 ㎥の残材を薪ストーブに使って冬を越そうとすると、約4年は使えるのです。それが今みんなゴミになっています。材木やさんが丸ってお金をもってチップやさんに行って処理をしてもらうというのが現状なんです。それを全部エネルギー利用してやろうとすると、それくらいの量になるのです。ですから、岩手県の住田町のように、自分のところで第3セクターとして工場をつくってそこで出ている残材をペレットにして全部町民に補助金をつけながら配って燃やしてもらうということをやると、資源の有効利用になるということと、地球温暖化がこれだけ問題になっている中で有効な提案ができるのです。私たちはそういう家のつくり方をします。それは間取りから違います。ストーブ一台で家の中が暖まるようなつくり方というのはそのためのプランニングが必要です。また、私たちはエアコンをつけません。エアコンなしで夏を過ごしてもらうという住まいづくりを私たちはしています。これは無理して我慢してください、ではなくてエアコンがなくても快適に暮らせるのです、ということを家づくりをもって証明していると思っています。今まで、エアコンをつけないで設計して住み始めて、とても耐えられないからといってエアコンをつけた人はほとんどいません。ちゃんと住めるのです。というのは、昔からこの地域もそうですし、千葉県は全域そうかもしれませんが、蚕を飼ったり、涼しい家のつくり方というのは技能としてもっているのです。それに倣ってあげると、人もちゃんと住めるのです。そしてエアコンがどんどん嫌いになるのです。エアコンがかかっているような環境にいると頭が痛くなったりして、エアコンのない暮らしがいかに自分にとって快適かということがだんだんと分かってくるのです。そういうことを住まいをつくりながら提案してきています。これは地域循環の理念的なことは今日本中で言われていますけれども、特にこの千葉県は山武杉の問題が大きくありまして、その山の現状をどう理解してどう生かしていくかということが結局は林業家を元気にすることになりますし、それに関わって生きている大工さん、左官屋さん、大工さんという家づくりの技能者一人一人が元気になれる道だと思っているのです。そういういい技能者がたくさん住んでいるところというのは文化的にも豊かだと言っていいのではないかと思うので、続けていきたいと思っています。私たちの考えてきた考えを理解してくれて活動を始めたのが、次にお話しする石井さんたち「木と土の家」グループなのです。これからこの運動がうまくいくと経済効果も合わせて上手くいくと考えています。まだまだこれからですけれども、がんばっていきたいと思っています。

石井　この4月に発足したばかりですが、有限責任事業組合、略してLLPグループ「木と土の家」の代表をしております、石井充と申します。私の言いたい事は今稗田さんがほどんど言ってくれました。私は、材木屋というのは元々顔と口の悪い人間と言われていまして、でも心は真面目なグループでございます。私たちは、山武木材協同組合の中で危機感をもって、この山武の地域の林業、木材業、建築業の現状を考えたときに、非常な危機感と不安感をもったのです。その現状を打破するためにはどうすればよいかと考え、今稗田さんがおっしゃったように、さんむフォレストの考えを踏襲しまして、

我々の財産である名木といわれている山武杉の地元の業者としての利点を生かした、山武杉の地元で地産地消の住まいづくりをしていこうじゃないかという結論に達したのです。魚でいえば、トロだけではなく丸ごと全部を使うという、そして高いと言われている山武杉を、比較的安価な値段で提供して、それがまた大きな意味で言えば地域産業の振興、地域の山林の再生、地球温暖化の防止という大きな理想を掲げて活動しています。我々は 11 の会社が集まってできたのですが、大河も一滴のしずくからと言うように、この我々の落とした小さな 11 滴のしずくが、この山武地域に木と土の家として大きな大河となって表れてくれれば、我々が山武杉をメインとして扱える材木やになれば、それで収益があげられるようになれば、それが山武の森林も再生していけるのではないかと自負して行っています。どうか、これからもご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い致します。

司会　石井さんにお伺いしたいのですが、そういう家づくりって高いのではないかという印象があると思うのですがいかがですが。

石井　それは、私は比較の問題だと思うのです。我々がやっている「木と土の家」も坪 60～70 万になると思いますが、それを都内の同業者の人たちに見せて判断していただいた時に、これをつくるのは坪 90 万くらいかかるという判断を頂いておりますので、私たちは決して高いとは思っていません。安いと自負しています。

司会　普通は家を建てるにはいくらくらいかかるのですか

石井　一般的なハウスメーカーさんの建売住宅は坪 25～30 万と言っていますが、実際仕上がる時には坪 40～50 万近くにはなると伺っています。

司会　11 社共同することのメリットは何ですか

石井　それは有限事業責任組合というのをつくりましたが、我々一社だったら小さな会社ですから、みなさんに補償ができないですが、こうやって集まれば全員で完成補償から性能補償までできるということが一番のメリットだと思います。

室住　千葉県東金市で農業をやっています室住です。最初に小松先生から元ニートだと言われてしまいましたが、今は農業を始めて 10 年になります。私は東京に生まれて育ったのは船橋市です、その後タイにボランティア活動に一年半くらい行きまして、その時に東金市の農家の人たちと出会いまして、それが縁でここにいます。よく新規就農者は脱サラの方が多いといいますが、私の場合はサラリーマンの経験も一度もないので、脱プーとか言われます。正直一年目二年目が大変で、蓄えもなかったものですから、農業のアルバイトをやりながら、今日の小松さんのお話にもあったようにそれも全部含めてなりわいと言えるのではないかと思うのですが、そんなことをしながらここまで何とか最近になってお米と野菜で生計を立てられるようになりました。私は、先ほど言ったようにお金もなかったので大規模でやることは無理でした。現在日本の農業というのは大規模化、外国からの安い農産物に対抗するために大規模化してコストを下げてというやり方をしているのですが、一方で食の安全性、または環境の面もあるのですが、化学肥料を全くつかわない生産物の需要も高まってきまして、やはり大規模に展開しているとそういうのは非常につくりづらい状況にあるので、私たちスキマ農家の人たちが入りこめるのです。コストの面ではやはりかなわないので、そのかわり生産物に付加価値をつけていこうと、そうすると住み分けがちゃんとできますし、また無農薬というのが里山の保全にも役立っているような気もします。実際には私たちも機械を使いますし、配達する時には軽トラも使ったりしますので、CO2 も排出していますし、偉そうなことは言えないのですが、ただ私の考え方の一つとして聞いて欲しいのですが、昔農薬や化学肥料がなかった時というのは、虫に食べられないように旬を考えて季節に植えるとか、農家一人一人が考えて作物を育てていました。ところが、あるとき農薬が登場してきて、これを使えば草がでない、虫もつかない、手がかからない、ちょっとの量でたくさんの食物がとれるということで広まっていったのだと思います。そこでお百姓さんたちは一度考えるのをやめてしまったのです。それがあれば事足りてしまうのですから、自分たちで知恵を出すことを止めてしまったのではないかと私は思います。この前新聞で見たのですが、農林水産省がこれからは有機農業を大切にしていきたいということで、これまで何十年も有機農業をしてきた方々から知恵を授かろう、その技術を普及しようという記事が載っていて、時代も変わってきたの

だなと思いました。私が今やっている農業も間違ってなかったのだなとうれしく思いました。

話は変わるのですが、私がこの先ずっと農業やっていくかというのは、先のことはわからないのですが、私がここで今こうしていられるのはやはり周りの地域の人、農家の人たちに支えられてやっとここで生計を立てられるようになったのですが、その協力性が非常に心地よかったのです。元々農家の人なら、後を引き継ぐということでできるのだと思いますが、新規参入となると色んな難しい条件をひとつひとつクリアしなければならないということがあって、私も周りの農家さんに助けられながら私もそれをクリアしてきたのです。実際、若い人たちで非農家だけれども農業をやりたいという人たちが結構いるのです。よく私の家に泊まって朝まで酒を飲んだりしているのですが、そういう人たち全員が農業をやることはできないと思うのですが、中には一人二人できそうな人もいます。その人たちを応援してあげたいなと、自分が受けてきた親切を次の世代の人たちにも伝えていきたいのがこれからの私の目標です。私はやはり、有機農業というのをメインに掲げてやっていきたいなと思います。全国でも有機農業を盛んにやっている地域というのは結構あります。東金はまだそこまでの域には達していないと思いますが、いずれは東金を有機農業で有名な町にしたいなというのが今の私の想いです。

司会　そういう有機農業のやり方は自分ではどのように勉強するのですか

室住　今までやってきた人たちの意見を聞いたり、でもやはり最終的には自分で実践してみることですね。何十年も有機農業をやっているという人に話を聞いても地域が違うので風土も違うし、同じようにやっても通用しない時があるのです。ですので、自分でやってみてダメならそこを改善してみてという風にやっています。

司会　虫なんかの対策はどうするのですか

室住　虫の対策には、覆いをしてしまうのが一番いいのですが、あとはコンパニオンプランツといって同じ作物を大面積につくるのではなくて、少しずつ間にハーブを植えたり、アゲハ蝶がキライなミントを植えるとか、そうするとキャベツがそんなに虫に食われないとか、それでも虫はいます。私も野菜の袋詰めをしていて、自分で見つければ捕るのですが、お客さんにも虫がいたわよといわれます。でもこれはしょうがないですね。

司会　では廣田さんお願いします。

廣田　林野庁の廣田でございます。もう既に、堂本知事始め、皆さんが言い尽くされたかなと思いますが、改めて少しだけお話します。私個人的に田舎で小さい頃を過ごしていたので、風呂に入るには木を切って薪をくべて入ったり、お腹がすいたら山にはいっていって、アケビを採ったり自然薯を掘ったり、しいの実を拾ったりして炒って食べてみたりしていました。これが小松先生の言っているような、自然と一体になったなりわいの一部だったのかなという気はしています。ただ、時代と共に生活様式が変わって、そういう生き方が切り離された部分がでてきたのかな、それが里山が荒廃した要因のひとつなのかなと思っています。しかし、経済一辺倒という行き過ぎた振り子が戻ってくる中で、里山の価値をもう一度見直そうかという動きが全国で出ていると承知しております。今日ご発表になった13の分科会のお話を聞いていましても、皆さん非常に色んな視点から里山を捉えていらっしゃるなと思いました。こういうのがもっと広がっていったらいいなと思っています。特に千葉県は条例をもっていて、条例についても里山をどうしようかということで考えると、経済成長が高かった頃は開発規制という取り組みになったと思うのですが、これからはむしろ保全、再生という取り組みになってくるのかなと思います。

そこで、所有者が高齢になっているという中では、地域の中もしくは地域の外、都会に住んでいる方のお力が必要になってくるのかなと思っています。そこで、会場のみなさんにお願いしたいのは、石井さん、稗田さんも言及されましたけれども、使うことが山を、森を守ることだということですので、できることをやっていただければなと思います。できることというのは、色々あると思いますが、ボランティア活動に身を投じて実際に里山活動をやるというのもあるかもしれません、または募金活動で募金をするというのもあるかもしれません。さらには周りの方に木を使うことが里山を守ることであることを周りの人にも伝えていただくことが、山を守る活動になると思います。これから政府として美しい森林づくり国民運動を展開していくわけです。福井大臣政務官からもご説明がありま

したけれども、森を大切にしていく、里山を大切にしていくということと合い通じることがあると思います。ぜひ皆さんのご参加をお願いしたいと思っています。以上です。

司会　美しい森林づくり国民運動はなぜこの時期に、この運動が提案されたのですか

廣田　2 月の頭に総理から、美しい国づくりを考える時に、その礎になる部分、森というのは古来から、色んな文化・伝統を育んできた部分でしょう。この森林が、今手入れが行き届かず美しくない部分もあるよね、この礎を気づくべきだというのが一つの契機だと思います。

司会　美しい国づくりは美しい森林づくりからということですかね。以上で 5 人の方にそれぞれお話いただいたのですが、お互いに聞いてみたいことはありますか。

堂本　廣田さんにお伺いしたいのですが、この「美しい森林づくり推進国民運動」の中で、里山がどう位置づけられているのかなと思うのです。白神や知床や屋久島などの原生林を守る、国立の公園ならきちんと守られていると思いますし、県立の公園や保全林など色々とありますが、また人工林や今度は育成林と呼ばれるようになりましたが、里山はある意味で言えば、農業地区の中に位置づけられてしまって、例えばちょっと様子が違うのですが、スイスの場合なんかは、一本の木を切るのにも許可が必要、カナダなんかはあんなにたくさんの木があってもバンクーバーの中ではなみずきを切ったら投獄されるくらいなのです。これは州花だからなんのですが、そういったことで言うと、農地という括りの中で里山がどんどん切り開かれてしまって、里山がどんどん壊れていってしまうという実態があると思うのです。林野庁の考えで言うと里山の住み分けは難しいのだと思いますが、今日午後からずっと一連の話になると、人のなりわいが田んぼや林や川や海や森と融合した形で捉えられての話なんです。これを政府はどのようにキャンペーンの中で位置づけてくださるのか、ということに感心があります。

廣田　まず、里山の捉え方に難しい部分があると思います。知事さんの意見に私は同感です。これから展開していこうとしている運動は、実は官主導ではなくて、役所主導ではなくて、各界各所の皆さんにこの運動の母体になるものをつくって頂いて、ご提言をいただくことを考えています。パンフレットでは漠と美しい森林づくりというような言い方になっていますが、当然近くの森をどうしていくのかということも一つの大きな課題だろうと私は思っています。

堂本　そうするとこの国民運動から離れて、林野行政として里山というものに対して、里山というのは非常に日本的な文学的な表現なのかもしれません、林業からいうと、この里山というものに対してどのような位置づけがあるのか、個人的なご意見でもいいので伺えたらうれしいです。

廣田　まず、里山を考える時に二つあるのかなと思います。まず、広葉樹で薪炭林としてつくったところと、戦後はげ山になったところに杉を植えて人工林になったところと二つあるのかなと私は思っています。それで、そういうところを違うように扱うやり方ってあるのではないかな、例えば山武杉が植えられているところはそれを材として使っていただく道でしょうし、元々薪炭林で経済的に得るものがなくなったから手を入れなくなって荒れているところというのは、お金じゃない価値というのが今みなさんの関心事項になっているわけだから、それをてこに整備を進める方向に考えるしかないのではないか、先ほど申し上げましたように、ボランティア活動、NPO さんがやっておられる活動であったり、所有者さんだけが整備するというのではなく、先ほど知事もおっしゃっていらっしゃったように。みんなで守る、地域で守るというようにやっていかないとなかなか里山というのは、再生は難しいのかなと思います。

稗田　今の森林の再生のお話なのですが、よく川上、川下を林業の話でするのです。木ができる一番上の川上から、一番下の川下への木材の流れというのが、非常に悪いのです。これは使われないからなのですが、決め手というのは難しいのですがまずは家をつくるということ、これはたくさん木を使いますし、国産材でできるだけ家をつくりましょうという話になるのですが、他に、先に申し上げましたように家

一軒をつくるとそれに見合った残材がでるのです。その残材をエネルギーに利用するというのは、第一次オイルショックの後というのは木質バイオマスエネルギーというのは注目されて、ペレット工場が日本中にできたということがあったのです。しかし、石油の値段が下がると国の補助金が切られてしまうので、ペレット工場がどんどん閉鎖してしまうことになったのです。今千葉県で最も近いペレット工場は奥多摩にあります。元々は岩手県で盛んに取り組んでいて、今では岩手型ペレットストーブというのができているくらいで、あちらが主流で行っているのです。ペレットというのは、木を高圧で押し出して顆粒状にしてあげるのです。そのペレットストーブというのは人が薪をくべるのではなくて、タンクにペレットを入れておけば自動的に温度管理をしてくれる、だから住宅ばかりではなくて工場や役所でも十分に使えるのです。岩手県のように町をあげてこれに取り組んで、そのために補助金をつけてあげれば普及するのです。2 年前くらいまでは石油よりも安く暖房ができたというくらいになったのです。これからますます石油事情が悪くなってくると、当然また盛り上がってくる話ですし、今のバイオエタノールの話もそうですね。おそらく木は捨てるところがなくて、エタノールの原料になるかもしれないし、私たちがやっているように直接的に薪になるかもしれないし、それを二次加工してペレットになるかもしれない、本当に捨てるところのない宝物になるかもしれないのです。しかし現在では、今ゴミ扱いで邪魔者扱いされているのです。ただ、これが実は森林再生を話すときに出ない話なのですが、木を使って家を建てましょうという話はでるのです。できるだけ千葉県は千葉県の木を使って家を建てましょうと運動するのですが、実はその末端の残材になってしまった部分をきれいに利用して川の流れをよくしてあげると、木ってすごく出てくるのです。山の再生ってこういうところがポイントかなと思っています。今私たちのつくる家に薪ストーブを必ず入れているというのは、灰になるまで木を使いきるということが、とても大事だと思うのです。そこに力を入れた、木質バイオマスをエネルギー利用しましょうということを国が背中を押してあげると、できるところはたくさんあるのです。今、千葉県で**バイオマスタウン構想**なんかが出ていますけれど、結局炭にするということしかでてこなくて、では結局炭にしてどうするのというと、畑に入れます、川を浄化しますということになるのですが、実際にはあふれちゃっているのです。ですので、手を加えてあげることで直接的にもっともっと役に立つ仕組みができるわけですから、その部分の川下の掃除をしてあげるともっともっときれいに流れるようになるのではないかなと思いまして、国の政策としては木質バイオマスをもっともっと、有効利用して欲しいと思います。

司会　暖房というのは、ひとつあれば家中暖まってしまうのですか

稗田　そういうつくりかたをしなければいけないです。例えば８畳の部屋にストーブをいれたら、８千キロカロリー～１万キロカロリーの容量がありますから、ゆだってしまいます。そんな使い方はもったいなさすぎるのです。やはり一台で一軒が暖まるような一体感のある家のつくりかたをする必要があるのです。私が思うのは、木の産地の景観として、そういう一体感をもった家が存在できると思うのです。昔からある民家をみて千葉らしいと言うじゃないですか、あれを千葉らしいというのは、そこの風土を反映して生まれてきているから千葉らしいのです。私たちの目指すのはそこなのです。非常に**大上段**でなまいきなのですが、そこまでいきたいと思っています。これが千葉の民家だといわれるようなものを、今の風土に、今の森林の状況を反映したものをつくり続けていけばそういうところに到達できるのではないかと思ってやっています。

司会　他にいらっしゃいますか

石井　知事さんにお尋ねしたいと思いますが、私たちは業者ですから、山林の保全等々大事だとは思いますが、先ほどもお話が出ましたけれども、山林は木を出さなければどんどん荒れていってしまう、木を出すためにはその需要を喚起しなければならないのですが、我々は何でもなんでも補助金だという考え方は好きではないのですが、公共事業などで地元の木を県内産の木を使ってくださいと言った場合に、ただそれだけの積算をすると高くなってしまうのです。単価としては地元の木を使う方がかかってしまうのですが、先ほどもでたように、地球温暖化の減少、里山保全、地産地消とトータルした場合にそちらの方が安いのではないか、そういう発想はないのですかとお伺いしたいです。

堂本　そこまで、温暖化の問題等を積み上げて取り組むということは難しいかもしれません。私がお話を聞いていて思うのは、もっとキャンペーンなどで民間の方に宣伝していくことだと思います。やはり今、千葉県はいい意味での PR が下手だといわれているのですが、千葉の木山武杉でもいいですし、山武杉以外の木でもいいのですが、千葉産の木で家を建てましょう、家具をつくりましょう、もっと小さなお

もちゃをつくりましょうと、もっともっと宣伝をしたらどうかなと思ったことが一つ。それから、積極的に工事などに使う場合に値段が高いので、外材と競争したらまずやっていけないと思います。家具なども、外材を使ったとても安いものが多くある。これを山武杉でつくってもおそらく値段が高くなってしまう。ですが山武杉の美しさ、千葉の風土のなかでの美しさ、私も知事室へきて一番最初に、ちょうどいいワーキングデスクがなかったので、どんな高級な家具を買うよりも山武杉でつくったものがいいのではないかと思い、県の作業をしているところに行ったら、丁度100年の大きい木があったのでそれを机にして、今私が朝から晩まで作業をしているのは山武杉の机の上なんです。天皇皇后がいらっしゃる時には、他にも机や椅子がないわけではないのですが、それは全部片付けてもらって、宮内庁の視察の時には山武杉でつくった机を真ん中にでんと置いたのです。それを切る時に年輪を知りたいからとっておいて欲しいとお願いしたら、明治元年くらいに芽が出たことがわかりました。それをみて。皇室にとっては年号が大切だったのでしょう、それをじっとご覧になって大変それを楽しまれていました。皇室に限らず、私たちの日常のなかで、徹底的にどう宣伝できるかというもっと科学的に今のようなシステムをつくって下さっているのであれば、ハウスメーカーよりも木の匂いがして触ると艶が出て味の出てくる木材なんだということを、徹底的にみんなに分かってもらうことが大事なのだと思います。家全部をやらなくても、壁の一部などでもいいでしょうし、私も小さな山小屋をひとつ借りているのですが、そこでは薪を焚いています。木を切ったり、火の色をみるのはとても好きなことで、CO2 を排出しているのかもしれませんが、それでもとても心温まりますね。文化的な電気を使う生活もいいかもしれませんが、もう少し私たちは自然のリズムにあった生活、なりわいがどんなに楽しいものなのかという

ことをもっと身近に伝えあい、学びあい、楽しみあうということも大事だと思います。県庁でできることも検討させていただきますけれども、なかなかCO2 の排出量まで換算することは難しいので、違う方法を考えたいと思います。

稗田　知事のお話に、先ほどからも感じていたのですけれども、知事は山武杉が高いと思ってらっしゃいますよね。しかし実はそうではないのです。安いのですよ。それはいいところは高いですよ。マグロだってトロは高いのですから。

堂本　たまたま私の部屋のは高かった・・・なぜって私はてっきり県庁が、知事が毎日使っている机ですから県で出してくれるのだと思っていたのです。しかしある日机の上に請求書があって堂本暁子様と書かれていたのです。県は一銭も出してくれなかったのです。

稗田　マグロで言えば大トロのところだったのですね。山武杉もトロの部分は高いのです。しかし庶民の暮らす家というのはそんな部分は必要ないのです。昔私はこの運動を始めた時に、昔の人は自分の家の裏山の木を切って家を建てたのではないですかって言ったら、そうではないと言うのです。裏山の木は売ったのだと、そこで売り物にならないような木で自分の家を建てたのだと言うのです。家の柱は節だらけだよ、でも節だらけでいいじゃないということなんです。そういう木なら安いのです。今、知事のいらっしゃる松尾辺りでにんじんのシーズンですが、この頃になると山が赤くなるのです。というのは、農家がにんじんの仕分けをするでしょう、ちょっと傷があるとか長さが足らない、太田市場に出せないにんじんはコンテナに詰めて山に行って空けてくるのです。だから山が赤いのです。そういう風に木も使われてきたし、本当にもったいないのです。先ほども石井さんが言ったけれども、マグロならカマから中おちまで全部用途を見つけてやれば単価は下がるので、知事がおっしゃるように決して高いものではないのです。

堂本　では私が、山武杉のヒレまで使った小さな家をつくって、みなさん見てください、こんないい家がこんな値段でできました、と言ったらみなさん来てくださるかしら。そうしたらマグロではなくて千葉で捕れた魚と野菜で食べましょう。

司会　それができたらいいですね。千葉県のシンボルみたいなものですね。こういうのができたら室住さんどうですか、行きますか。

堂本　じゃあ野菜つくってもってきてもらおう

室住　まかしてください。そこで販売させて下さい。

司会　先ほど知事のお話の中に合ったように、暖炉で火

を焚くと人が集まるっていいますよね。

堂本　私は昔から囲炉裏も好きなんです。囲炉裏というのは家族の集まる場で、そこでおしゃべりをしている、近所の人が来て・・・と、本当に好きなんです。廣田さんが愛知県で育って森に行ったとおっしゃっていましたよね。私も年齢からいって疎開をしたものですから本当の自然の中で育ったのです。その育ち方というのも、何にもなくなってしまった、セリを川に摘みに行って山菜を採って栗を拾って、川では石をひっくり返してカニを探して、そういうものを食べたのです。しかしこの平和のときはものも食べるものもあふれていて、つくったものをチンとすれば何でも食べられる。でも、それはとても自然と人間のなりわいを淘汰しているのです。ノビルなどの色んな草を摘む中で、蛇に出会ったり昆虫に会ったりするのです。こんなところにスミレが咲いていたのだとか上にアケビの実がなっていると、これはあの子には教えないでおこうと秘密にして毎年なるのを楽しみにしていたり、グミの実や桑の実を採るということはとても自然に近いですね。私は信州だったので、浅間山まで浅間ベリーを採りに行きましたけれども、とてもきれいな朝焼けの中でベリーを摘んだ、そういう時自然と人間が一緒になっていて、自然がなければ人間は生きていくことができないということを、我々の年代の人間は嫌というほど感じざるを得なかったのです。しかし今はそれが遮断されていることが多い、セメントなど、そういう文化的遮断を取り除けば、廃棄物などもこんなに来ることはないし、やはりとても腹が立つのはこんなにきれいな谷津田に残土や産廃が捨てられたら、みんな悲鳴をあげていますよ。私がいつも本の書き出しに書くのは、不思議の国のアリスのように動物たちが話すのならば、カエルもタニシも昆虫たちも、もう止めてくれよ人間たちと言っていると思うのです。何か辛い思いをしているひとはいませんか、というのが千葉県のキーワードですが、それを植物や動物にも聞いてあげたいと思うのです。そうするともっと自然と私たちの間の文化的な自然のなりわい、動植物や水など、人間はその中の一部なんだ、自然のリズムに合わせてというお話もでていましたけれども、なりわいを表現する時にその自然のリズムに合わせて私たちがいきていければ豊かな生き方にもなるだろう。それを否定する方もあるかもしれない、エアコンの中で外国にもコンピューターで連絡して、そういう生活と自然との調和する生活が矛盾するものでもないので、それを両立させるように考えていく知恵を私たちはもっていかないと、自然からのしっぺ返しを人間がいつか受けるのではないかなと思います。今日は里山、里海をもう一度生き返らせ

る決心をするような日であってもいいのかなと思います。

司会　会場の方からも質問があれば出していただきたいと思うのですが、いかがでしょうか。

浜辺　東金市の農民の浜辺と申します。今日は本当に偉い方々と一緒になれて、皆様のお骨折り非常に感謝しています。それでは、里山をどういう風にして守るか、里山をとのようにして守ってきたかという過去を振り返ると祖先から学ぶべきものがたくさんあると思います。それで里山というのは端的に申しますと、地元農民の血で守ってきたのです。そのおらがおらの山に勝手に竹の子を掘って行って勝手に木を切って行ったなど、些細なことで個人的なことでの争いもありますが、町有地の里山もあります。そこにある山荘は秩序として農業道徳をもっています。そのために水を守る、田を守る、土を守る、私らは部落で長老に聞いた話に、一枝一指、一木一腕、無断で共有地の枝を切ったら指一本とられる、無断で木を伐採されたら腕一本とられる、森を大事にしないと農業用水を確保できない、そして同時に森から出た水は農村村落の中に川になっていきます。そこで米を研いで飲み水にしています。私たちが子どもの頃は魚を捕まえに行って、そこでおしっこをします。そうするとお前ら曲がるぞと怒られた、そのように幼い頃から里山を守るための教育がされてきました。近年、都市化されて里山の荒廃について小松先生にもご尽力頂いていますけれども、団塊の世代や都市住民の方々が、農家の荒地を開墾していただいてますけれども、農村に入るからにはたとえ一畝しか借りていないという人たちにも、その土地土地で守ってきた歴史をやはり教育しなければなりません。教える人がいなければいけないのです。しかし最近は核家族になってしまい、若い人たちは東京へ出てしまい里山を守るどころではない、昼間農村においでになれば分かるでしょう。もう明日あさって死ぬじいさんばあさんと数少ない子どもしかいません。赤ん坊の泣き声なんてめったに聞けません。鯉のぼりだってめったに上がらない。というわけで、農業と農村を守るためにはそれなりの秩序を教えなければならないのです。そう思って言わせて頂きました。

司会　他にはいかがでしょうか

安井　山武市の安井でございます。なりわいの原点は私が先人の中臣鎌足の言い伝えによれば、いわゆる祝詞、山の幸海の幸野の幸が自然に採れるのを祝う、なり祝うからなりわいになる、という鎌足公の言葉が伝わっています。日本の昔からの用語であると解釈してよいと思います。以上です。

司会　では、もう一人お願いします。

上善　千葉市から参加している上善と申します。先程堂本知事から山武杉の木材が売れないのは、宣伝が足りないのではないか、という発言がありました。単純に宣伝だけの問題ではないと考えます。山武杉を認識していただくため、山武杉の歴史的経過をお話します。

山武杉といえば千葉県を代表する林地（森）であり、良材が産出されることで有名でした。しかし、山武杉は始めからいい林地ではなかったのです。千葉県山武郡睦岡村（現在の山武町）のアララギ派の歌人で山林経営者だった蕨真一郎さんが、明治末期に杉、松、広葉樹が雑然としている山武の森を見かねて改造しようと思い立ったのです。歌人としての審美眼には、山武の森林は美という観点からほど遠いものだったようです。美林から良材が出るのは林業技術では常識です。かって見た、信州・木曽山のような美林を北総に再現したいと蕨さんは考え、私

財をなげうって地元に農林学校を設立。人づくりから森づくりを始め、栄光ある千葉県の山武杉が美林に育ったのです。

ところが山武杉の現状はどうでしょうか。管理不十分で溝腐れ病が蔓延して倒木が目立ち、放棄されたゴミの山など惨憺たるものです。どうにも我慢ならないのは、山武の森になぜ「秋田杉の住宅」が出現したのでしょうか。林業の構造的不況の煽りを受けてこのような森になったのは一理ありますが、良材を産出している林業地には人の心が結集しています。行政がこれからの山武杉のことを考えるなら、全国各地で立派な森林を育て、良材を産出している林業地に倣うべきです。

良材産出で代表的なのは宮崎県諸塚（もろつかそん）村、高知県寿原町（ゆすはらちょう）、奈良県川上村ですが、これらの地域では県政と村政、村民が一致協力して立派な山づくりをしています。いづれも、県庁所在地から車で２時間以上かかる僻地です。中でも宮崎県諸塚村に少し拘わりましたので詳しく述べます。この村では戦後６０年の村行政の中心を人づくりにおいてきました。教育立村を唱えながら、多くの人材を育て美林を育てました。近年では（注１）メキシコに国際本部がある「森林認制度」ＦＳＣを取得し、産出する材に付加価値をつけ林業経済的にも多大の効果を挙げています。私が言いたいのはここからで、諸塚村では住宅の産地直売システムを確立しています。ＮＨＫが全国に放映したので先刻ご承知と思います。諸塚村の産直システムとは、都会の人が家を建てる時、村を訪れ山林を見て木材を買い付けます。山主と施主の結びつきがここから始まり、住宅の完成後も親戚づきあいのように互いに行き来しています。千葉県でも山武地方にこのようなシステムを確立して地元が活性化するように県政で支援されては如何かと思います。

）

稗田　産直住宅のことは承知しております、参加はしていませんけれども、諸塚の大変田舎にある村ですが、施工者は東京や大阪や色んなところにいるのです。それはその仕組みをつくった方の力量は計り知れませんし、それを外れずに続けていく努力も大変なものだと思います。ただ、ひとつの成功例としてありますね。今おっしゃったような、建具師が山に木のあるところからみるというのは、東京の木で家をつくる会なんかもやっています。木の見学会をやってから家を建てましょうという、しかし私たちはそういうことはあまりやってないのですが、たまたま今石井さんと一緒に、私が設計をして石井さんが工事するというのをやっているのですが、石井さんが山で木を切ったよ、というタイミングに私が施主さんにご連絡して家族でみに来るのです。子どもは木に上がってみたり、泥だらけになって喜ぶのです、きっと強烈に印象に残るのだろうなと思うのです。その方は船橋の方ですが、自分たちがまさかこんな風に家を建てられるとは思ってもみなかった、元はどこかの分譲地にハウスメーカーに頼んでつくろうかとしていたのをたまたま私と知り合ったのです。そういう意味では、これからもっと森林に対する認識を深めてもらうためにもこういう見学会などの必要性はあるのだと思います。

司会　田んぼの学校や市民農園はあっても、まだ森についてはそういう事例は少ないですね

稗田　専門家の領域で人は入れないような雰囲気がありましたけれども、そういうところからみてもらえることが大事ですし、先ほどのストーブの話もライフスタイルの転換だと思うのです。意識改革です。よくいうのですが、大塚家具に行くと色んな家具が売られてますが、全部テレビ中心に配置された家具なんです。

やはり新しい家族の中心として自然の炎がある、その周りに家族や近所の人が集まって、酒を飲んだり話をしたりする、そういうこれまでの生き方を転換するような部分と、千葉の木で家をつくるというのが結びついてもらえないとなかなか本物にならないなと思っています。諸塚村の例なんかとても参考になります。ありがとうございます。

堂本　実は知事公舎というのは４０年も経っていてボロボロで中の壁が染みだらけなんです。それを我慢して使っていたのですが、さすがに６百万県民のいるところで、こんな汚い公舎に人を通すことはできないと人に言われて考えたのですが、私はやはり山武杉が好きなので、山武町の蕨さんにとってもすてきな組子をつくっていただいて、今までガラスだったところにその組子を入れてカーテンをやめまして、山武杉のきれいな障子にしていただいて、見違える

ようになりました。やはり１７代目だそうですけれども、蕨家というのはずっと建具をつくってきて、何故私がそのことを知ったかといいますと、この間町村合併のときに、山武になったのですが、その時に松尾、山武、蓮沼、成東の調書を読んだのです。その時に山武は建具、山武杉抜きには考えられない町だということで、ご挨拶をしました。そして江戸時代から山武杉の建具で栄えてきた町だということです。そこで私は、やはり千葉県のものを入れるのがいいということで、知事室も杉ですし、知事公舎の欄間も山武の建具で組子になっていてとても美しいです。外国からのお客様をお通しすると皆さんなんて美しいのだろうとおっしゃいます。そのたびに私は、これは山武のですと威張ってます。威張れるだけのものがあるので、ぜひ皆さんも家の中に本当に小さなものでも一部に組子を入れるだけで素敵になりますし、誇れるものになると思います。

上善　山武杉の欄間の話がでましたけれども、25年前に東大の筒井教授を中心とする森林文化教育研究会が東金市から山武市一帯の調査をしたときに聞いた話です。かつて、東金は関東一円に建具を出した街で日向駅の積み込みもあったらしいのです。しかし２５年前には日向の駅前に一軒だけ欄間を作っている家がありました。今それがあるのか、思い出しました。

司会　時間になりましたので、最後にパネラーのみなさんに一言ずつ話していただいて終わりにしたいと思います。

石井　知事がこんなに山武杉のことを勉強して宣伝してくださるとは思ってもみませんでした。それと、先ほど宮崎県の例を出していただきましたけれども、東国原さんと堂本さんと違うように、宮崎と千葉では多少やり方も地域性も違うと思いますので、それは参考にさせていただいて研究させていただいたら大いに勉強になると思います。これからも「木と土の家」よろしくお願い致します。

室住　里山の保全ということを先ほどから色々お話があったと思いますが、やはりそこには人がいないとどうにもならないという事で、それを改善するひとつの例として、里山のパンフレットにもあるような絵の景色を欲している都会の人たちも大勢いて、そういう人たちと田舎と都市の交流を積極的に進めていけばとても楽しいし、いいのではないかと思います。お金を儲けることは難しいと思いますが、お金を儲けることはある程度でよくて、あとは人とのつながりを大切にしていけばすごく楽しい人生になるのではないかなと思います。

廣田　先ほども申し上げましたけれども、戦後植えた木というのがこれから利用できるようになってくる、そういう中で、新しい技術革新ができてきた今を捉えて森林の再生をしていかなくてはならないだろう、それは里山をまた別の視点から取り組むものがあるのだろう、例えば癒しだったり、森林環境教育だったりであると思います。ぜひこのシンポジウムを機会にみんなでできることをやりたいと思います、よろしくお願いします。

司会　時間になりました。先ほども知事さんがおっ

しゃったように、みんなで参加して里山を守っていく、人が里山に入っていく仕組みをつくりたいと思います。終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

司会　パネラーの皆様、小松さん、お疲れ様でした。どうもありがとうございました。議論は尽きないと思いますが、これでパネルディスカッションを終りにしたいと思います。もう一度みなさんに拍手をお願い致します。大変お疲れ様でした。この後の交流会にもぜひ皆さんご参加下さい。では閉会の言葉を、実行委員会副代表であります栗原よりご挨拶させていただきます。

栗原　みなさま遠くからこの東金の地にお越しいただきありがとうございます。パネリストの皆様もご参加いただきありがとうございました。この半日の時間を有意義にお過ごし頂けましたでしょうか。感謝を申し上げます。我々一同精一杯がんばりました。今年は４回目ということで「なりわい」という題でした。昔日本は農が中心で、色々ななりわいがあって衣食住全てが農を中心にまわっていたと思います。それが近代化の中で、科学技術がつくられ工業化が進んだ中で、なかなかなりわいというものを、農を中心に行っていくことが難しくなってきました。しかし先ほどもお話がありましたように、新しい価値を見つけていく必要がでてきた、日本人の今の生活様式の中で、食べ物のせいもあると思いますが、日本人の血液はかなり汚れているといいます。そういうものを我々の生活を見直す、社会を見直すことによって考えていけるのではないかと思います。

今回で４回目を迎えたこの里山シンポジウムも、いろいろな形で行政、市民、地元の人たちに話し合いの場を提供することになってきたのではないかと思います。４年前はぎくしゃくとしていましたが、今では市民と行政が同じテーブルについて話し合いができるようになってきました。ただ、まだまだこういう試みは続けていかなければならないな、と思っています。市民が自分の現場からの話をしていく、今までの政策はどうしても行政の組織の都合のいいようにつくられてきたような、ちょっと言い過ぎかもしれませんが、市民からはそういう風に見える面もありました。これからは市民と自治体、行政が一緒になって地域をどうしていくかという中で、行政の仕組みも変えていこう、行政の仕組みがあって政策があるのではない、ということを最後に申し上げて終わりにしたいと思います。みなさん、本日はどうもありがとうございました。

（注１）森林認証制度　（略称：FSC）

（Ｆｏｒｅｓｔ　Ｓｔｅｗａｒｄｓｈｉｐ　Ｃｏｕｎｃｉｌ）

環境保全面からみて適切で、社会的な利益に適い、経済的にも持続可能な管理をしている森林経営者の森林を認証する制度。その森林から産出された木材、木材製品に「ＳＦＣ」のロゴマークを着け、幅広く消費者に流通させている。「ＳＦＣ」の焼き印が押された製品は若干高価だが、消費者は間接的に森づくりを支援していることになっている。